

得たことである。短時間ではあるが、三者それぞれの立ち位置を、毎年毎年、様々な意味において想起させてくれるのである。

また、本年度は、新学部体制下ではじめて入学し、かつての連続講演会にも参加してくれたであろう人たちが卒業年次を迎えている。そして、今、あらたに進級しようとしている後輩たちの参加を得て、連続講演会は今年も開かれた。彼・彼女らの関心は、留学に関すること、研究と現代とのかわり方、大学院進学や就職に関することなど、多岐にわたっている。おおむね、歴史学と考古学の勉強に興味を持たという反応が返ってきたが、パワーポイントの使用以外に、もっとレジュメを配布してもらいたいとの提言もみられた。進級選択の資料として手許に置いておきたいということらしい。もっともである。

これから、さらに工夫しながら、三者それぞれのために、この行事を続けていきたいと思うことしきりである。

## 〈第一回〉

### 歴史を描くという感覚

佐々木 啓

今回は「歴史を描くという感覚」というタイトルでお話しさせていただきます。「感覚」という変な表現にしたのは、今回の講演では、「大上段」で論理的に説明するというよりも、自分の経験をもとに「感覚」的な話をした方がよいと思ったからです。以下、歴史学とはどのようなものなのか、なぜ歴史研究の道に進んだのか、といった二つの「感覚」についてお話しします。

まず、歴史学とはどのようなものなのか、という点について。私の専門は日本近現代史なのですが、特に戦時中の労働力動員について調べています。現在関心を寄せているのは、簡単にいうと①「戦時中、国家は民衆をどのように工場に動員したのか？」という問題と、②「動員された民衆はどのような意識を持って働いていたのか？」と

いう問題です。これらの問いに対する答えを日々考えている、というわけです。

①については、どう回答が考えられるでしょうか。国家総動員法があった時代ですから、民衆は強制的に動員されて働かされた、というイメージが強いかもしれませんが、もちろんそれはそれで事実なのですが、しかし、そんなふうには無理矢理連れてこられた人たちが果して一生懸命働くでしょうか？ 国家は単に人に強制するだけではなく、何か色んな「しかけ」をつくったのではないかと。こういう想定に立って史料を探してみると、意外と色んな「しかけ」が見えてきます。たとえば「歌」です。ここに挙げているのは「増産音頭」のレコードの広告です（『大阪新聞』一九四三年四月二八日付夕刊）。「やりぬけ増産」、「迷利犬、闇愚魯倒すまで！」とあります。大日本産業報国会制定とありますから、国家が率先して「音頭」を作り、社会に普及させることで民衆の間に「増産」への意識を高めようとしたことがわかります。このよう

に、単なる強制だけでなくそれ以外の方法（たとえば歌ったり踊ったり）が民衆を動員する際に使われたことをどう捉えればいいのか、日々考えているわけです。

②についてはどうか。戦時下の混乱のさなかですし、慣れない仕事をやらされているわけですから、大変辛い思いをして働いていた……というイメージが強いかもしれません。しかし、たとえば次のような漫画があります（加藤悦郎編『勤労青年が描いた増産漫画集』新紀元社、一九四四年）。この漫画は当時軍需工場で働いていた中川さんという若者が描いたものですが、「増産」というトロツコを押してきた労働者が、積み上げられたカバンの上に座ってお札を数える「営利本位」の経営者に邪魔されて先へ行くことができない、という様子が描かれています。「これも増産の大きな邪魔物だ」というわけです。戦争に勝つために無理やり働かされている労働者たちにとって、自分の利益のことしか考えない経営者は許しがたい存在でした。ここには、

そうした戦時下の民衆の「怒り」が描かれているように思います。民衆は、単に強制されていただけでなく、このような怒りに突き動かされながら戦時下を生きていたと考えることができるのではないのでしょうか。

以上、二つの史料をもとに自分の研究を紹介しましたが、ここで言いたいのは、要するに歴史研究とは、史料に基づきながら、過去の新たな側面を照らし出していく作業だということです。歴史研究にたずさわる人間が日常的にやっているのは、おおよそこのような作業なのだと私は思います。

つづいて、なぜ歴史研究者の道に進んだのかという点について、自分の経験を簡単にお話ししたいと思います。私の場合、卒業論文が大きなきっかけでした。卒業のテーマを考えるに当たって、戸山図書館で歴史の本を物色していたときに、家永三郎『太平洋戦争』（第二版、岩波書店、一九八六年）という本に出会ったのです。この本には、アジア太平洋戦争を考える上で重要な論点が沢山詰まっているのですが、私が特

に面白く感じたのは、「翼賛選挙」の無効票や街頭での民衆の声について触れた部分でした。そこには、単なる「被害者」ではなく、実にユニークな動きをとる民衆の姿がありました。戦時下の民衆については一般的に、戦争に動員された、軍隊にとられた、といった、「〇〇された」という受動的なイメージが先行しがちですが、私が『太平洋戦争』で出会った民衆の姿はそうではなく、独自のかつ主体的なものでした。これが当時の自分にとっては、とても魅力的なものに映ったのです（なぜそれが魅力的だったのかといわれると、答えるのが難しいのですが……）。ともあれ、その魅力に誘われるまま、以後十年近く同様のテーマを研究しつづけて今に至るわけです。

このように、やはり私の場合は本・史料との出会いが大きかったように思います。なので、これから専攻や進路を選ぶ皆さんに私から何かいえることがあるとすれば、そうした〈本の一節〉との出会いを見逃さないようにしてください、ということにな

るでしょうか。もちろん他にも色々な出会い方があって、一つの例として、参考にしていただければ幸いです。

## モンゴルとイラン世界

―歴史をとおして自分も知る―

高木 小苗

大学に入って間もない時期、誰もがよく聞かれたことがあるだろう。あなたはどの出身ですか。私は、かつてこの問いが少々苦手であった。なぜなら、私には明確な出身地がないからである。父母は二人とも瀬戸内地方で育ったが、私自身は父母の出身県の隣の県で生まれ、今ではその地域の方言も話せない。小学校は関東地方、中学は関西圏、出身高校は東海地方にあった。同じ県でも、山を越えれば、イントネーションも表現も変わる。関東から持って行ったしょうゆは、関西では濃すぎて、家庭科の授業ではかの友達のしょうゆと混ぜること

ができない。

今振り返ると、同じ日本の本州でも、言葉も文化も多様で、異なることを実感し、小規模な異文化接触の体験の連続であった。この体験をより広範囲の地域、複数の文化圏を対象として客観的に整理し、他文化を深く理解することにつながらないかと感じたのが、文学部に入学し、歴史を専攻するきっかけとなった。自分の性格上、直接関わる社会、人間心理や地域、文化圏のみを考察対象にすると、他者を見ることなく自己完結になる、または既存の観念の影響を受け、視野が限定され、偏見が生じるかもしれない。そして近現代の世界状況の背景である過去を知りたいと感じていた。そのため、敢えて前近代という時代設定、比較的、当時日本とは直接関係のなかった地域、民族を対象として選ぶに至った。

十代の頃、冷戦終結の声明が出され、共産党体制が変革の時代を迎え、湾岸戦争が起こり、パレスチナ暫定自治政府が形成された。そして現在のユーラシアの民族構成

がどのように形成されたのか興味を抱き、世界史を学習するうちに、前近代におけるユーラシアの民族移動、その中でも特に生業として遊牧を行っていた集団の移動に関心を持つようになった。また、同時に文化人類学の分野の遊牧に関する書物に触れ、歴史史料の分析と現地調査に基づいた研究をしたいと思うようになった。その後、大学受験の結果、文学部に入学して東洋史を専攻し、現在の指導教官の吉田順一教授が歴史史料の分析、そして地理や現在のモンゴルの遊牧に関する研究・調査に基づき、十三世紀のモンゴルの支配者カーン達の遊牧経路、四季の宿営地について明らかにされた論文等に関心を持ち、現在のゼミに参加した。

次に、発表の際には、現在の中国から南ロシア、ユーフラテス河に到った十三・十四世紀におけるモンゴルの支配地域、また専門であるイルハン国の範囲（イラン世界）を地図で示した。チングス・ハンの孫フレグがモンゴル支配地域の各地から召集され